

## 「県民と県議会との意見交換会」 **釜石会場** の概要

〔日 時〕 平成28年4月28日（木）14：00～16：00

〔場 所〕 釜石地区合同庁舎4階大会議室

〔テーマ〕 「地域の将来を担う人材の育成について」

〔参加者〕 （8名）

二 宮 雄 岳（釜石リージョナルコーディネーター協議会（釜援隊）隊員）

伊 藤 聡（一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校 代表理事）

柏 舘 英 樹（タウンポート大町テナント会 会長）

中 村 博 充（KAMARQ株式会社 代表取締役社長）

菊 池 良 一（大槌商工会 会長）

神 谷 未 生（一般社団法人おらが大槌夢広場 事務局長）

菅 野 祐 太（NPO法人カタリバ コラボ・スクール大槌臨学舎 代表）

平 舘 理恵子（一般社団法人KAI OTSUCHI 理事長）※ 敬称略

〔出席議員〕 （8名）

田村勝則議員、小野共議員、千葉進議員、嵯峨耆朗議員、佐々木茂光議員、  
城内よしひこ議員、飯澤匡議員、千田美津子議員

〔オブザーバー議員〕 岩崎友一議員

〔事務局職員〕（6名）

### ◆ 参加者自己紹介及び現在の業務や活動状況の紹介

#### ○二宮さん

釜援隊は、釜石市の復興支援員の集団で、様々な関連団体と協働して復興のサポートを行っている。隊員は現在14名で、地域系とテーマ系の2軸展開で活動している。

地域系の活動では、自治会の立ち上げ等のコミュニティ形成支援や地域の担い手の発掘・育成を行っている。

テーマ系の活動では、釜石市の再生に向けたなりわいの強化ということで、観光産業に対する支援や、森林組合、三陸ひとつなぎ学校等の地域の団体と連携しながら活動を行っている。

私の業務は、釜援隊の隊長として隊の総務、運営をマネジメントしながら、地域系の活動をしている。

普段は、平田地区生活応援センターで、災害公営住宅の自治会形成や、第6仮設団地、平田仮設団地のコミュニティ形成のお手伝いをしている。県営の災害公営住宅では、沿岸広域振興局土木部や指定管理者と一緒に、管理人の問題や自治会の立ち上げの支援をしている。

もう一つの仕事は、中心市街地の復興、活性化。商店街には、商業の集積として地域住民の生活を支えるという経済的機能と、地域住民が集うコミュニティの置き場としての社会的な機能がある。商店街を復興させることで、釜石市の中心市街地の経済的機能と、地域の皆さんが集まってくださる場を再生しようとしているところ。

復興支援員は、自分たちが活動するというより、地域の方をサポートする立場。これからの地域のコミュニティを支えていく方や、地域の商業集積を形成して守っていく方といった地域の担い手を育てていくのが私達の仕事だと思って活動をしている。

## ○伊藤さん

三陸ひとつなぎ自然学校は、震災から1年後の2012年4月1日に立ち上げた。活動自体は震災直後から行っていて、当時はボランティアの受け入れを行っていた。現在は、「地域のために立ち上がり、挑戦する人が多いまち釜石」の実現を目指して様々な活動をしている。

小学生の居場所づくりをしている。公園に応急仮設住宅が建ってしまい子供の居場所がないということから始めた。現在は、地域にいるいろいろなスキルを持った方々と、小学生向けのプログラムを行っている。地域の豊かな自然を感じてもらい、自分が住んでいる町にはこんなに面白い人たちがいるんだということを知ってほしい。

子供向け以外にも、体験プログラムをつくっていて、3月の三連休には20プログラムを出し参加者を募集したが、ほぼ満員になった。

地域外の人にももたくさん来てほしいが、一番大事にしているのは、地元の人が地域と関わる機会をつくること。まちに関わる機会を持つことが、いずれ復興が成ったときに、復興感を持つということにつながると考えている。観光という手法を使ってまちに関わる機会をつくり、いろいろなまちづくりの議論に参加し、議論したことが実現していけば、復興感を感じることができるとは思わないかと思う。

## ○柏館さん

タウンポート大町には、被災した業者8者、新規で入った業者1者の9者がテナントとして入っている。そのマネジメントをしているのが釜石まちづくり株式会社で、再建する際には、タウンポート大町8者とまちづくり株式会社、イオンタウン釜石、中心市街地の数社でグループ補助金をいただき再建した。

平成26年12月にオープンし、約1年と5カ月が経過した。にぎわいや憩いの場の創出等を目的としてカルチャー教室を開催したり、市の花火大会に合わせた浴衣イベントを行った。通年では中心市街地の定期清掃もやっている。

自分達の商売を再建しなければという気持ちはもちろんあるが、補助金をもらって再建したので、まちのために役に立つ事業を進めなければならないという想いで仕事をしている。

平成28年度は、去年開催したカルチャー教室を大町周辺の店舗と共同でやるなど、拡大して事業を実施したいと考えている。

本業のほうは、中心市街地にはまだ住宅が少ないので買い物に来る方も少ないが、本年度は災害公営住宅が完成するということなので、自分たちの将来につながってくることを期待して、今はみんなで我慢して頑張っている。

## ○中村さん

大阪出身だが、3年前に二宮さんと同じく復興支援員の釜援隊として釜石市に来た。釜援隊の活動で、市内の中小企業や水産業の支援をする中で、会社を立ち上げた。

当時、浜千鳥や藤勇醸造などの会社が協議会をつくっていて、その支援に入り、市内の企業と一緒に水産業の6次産業化を推進してきた。キリンや日本財団の支援をいただきながら、釜石の魚介類を使った商品開発や販売をしてきた。今は、「海まん」という商品を開発して、販売している。

復興やまちづくりということに対して、個社の利益だけでなく地域にお金をまわる仕組みをつくることを目的にしてやっている。同じ想いを持つ市内の企業と連携して商品開発しているが、水産業、一次産業に携わる方の収入アップや、釜石の食のブランド化につながればよいと思う。

また、釜石に戻りたいけど仕事がないという方には、新しい仕事をつくるから一緒にやろう、

帰っておいでといえるような取り組みになればいい。

今後も新しい商品を出していくし、釜石にある魚介類や農産物の情報も発信していったらいい、釜石にはおいしいものがあるということをPRしていくような役割を担いたいと思っている。

### ○菊池さん

震災から5年経ったが、中心市街地の計画は、陸前高田市、大船渡市、釜石市、山田町ができて、大槌町だけが未だ決定されていない。町長や産業振興部と一緒に進めている。

中心市街地に中心施設をつくる計画については、構想段階では46社から問い合わせがあったが、家賃額を公表したら応募者が2名になってしまい、なかなか難しいことになっている。

グループ補助金についても、平成26年頃に申請した人と、今からしようとしている人では条件が全然異なる。申請に必要な書類が多く、条件も非常に厳しい。最初に認定された方に不正等があつて厳しくなったのだと思う。

水産業、製造業はかなり回復してきているが、商業地は3月の末にやっとまちびらきがあつた。まちびらきによって自分の土地が決まるし、商業地も7月には決定することになっているが、まだまだ遅れてる。

### ○神谷さん

おらが大槌夢広場は、当初は復興食堂を運営していたが、現在は、人材育成を行っていて、その手段としてツーリズム事業を行っている。ツーリズム事業というと、地元の観光業者、ホテル・民宿、お土産屋の業者にお金が落ちるような仕事と思われがちだが、それが目的ではなく、人を呼び込んで、地元の若手と交流させることによって地元の若手の人材育成ができると思っている。

この思いに至った経緯は、私は名古屋出身で、震災直後から別のNPO経由で入ったが、他のメンバーは大槌町の間人で、彼らは、津波の後、多くのボランティアや支援者、専門家と交流し、意見交換し、学び合いがあつたことで人間として成長できたという実感を持っている。津波があつたからどうということではなく、人として成長するには人の波をつれてくればいい、ということでも今後も継続して大槌町に人が来続けるシステムをつくらうと思って活動している。

主な事業として、企業研修と修学旅行の受け入れを行っている。企業は、リーダーシップ研修と新人研修で大槌町に来てくれている。企業研修では、私たちが直面している復興期の問題を町民として考えるというワークショップを行っている。被災した役場庁舎の保存問題など、被災地には、正解のない課題がたくさんある。それは企業が抱えている問題も同じで、未来に対してどういう反応をすればいいのか誰にもわからない中で、被災地の課題を体感してもらい、企業の経営方針やプロジェクトへの覚悟や決断に役立ててもらっている。

私たちがやっているツーリズム事業は一般観光とはだいぶ離れているが、目指しているのは人を呼んでくること。大槌町に来た人と関わってもらって、地元の人、特に若手の人材育成につなげようとしている。

いずれはその波を沿岸全域、さらに岩手県全体に広げて岩手を学びの場所、いろいろな形で学べる場所として人を呼び込める場所にしたい。観光素材だけに頼ってしまうと、京都や北海道、沖縄とは勝負できないので、別の視点から人の流れをつくるような、そういう夢をもって活動している。

### ○菅野さん

震災で学習の場所を失った子供たちに学習場所を整えるための、コラボスクールを行っている。小学生、中学生については、勉強の場所を開放している。勉強して、できなかったことができる

よくなるということは、子供たちが新しいことに取り組んでいこうという力になると思っている。

大槌町は、大学進学率が元々低く、東京だと75%が進学するのに、大槌町では25%で、生まれた場所によって機会格差が生まれていると感じている。

今の大槌町が抱える課題を、高校生自らがどう取り組んでいこうか考えてさらに実行していくマイプロジェクトという取り組みを行っている。2020年の大学入試改革で大学入試が変わると言われている中、課題を抱えている岩手県の沿岸部や中山間地域のほうがより高校生が学べるということが起こせるのではないかという思いでやっている。

大槌町だけでなく釜石市や宮古市、盛岡市などと連携しながら、他流試合をすることが高校生が育つ環境と思っている。高校生には、町を出る前に町のことを好きになって町の課題に取り組む経験をしてから、町から送り出したいと思っている。

## ○平舘さん

K A I O T S U C H I という会社は震災後に立ち上げた。震災前から問題になっていた人口の流出や、雇用の種類が限られている、業種が水産業や一次産業に限られているというところを変えたいという思いでスタートした。

最初は大学と連携してICT関係の技術を地元の方たちに教えるということを2013年から2年間行った。そのICT教育を受けた人たちを、アプリ開発やweb制作、3D化等のICT技術を持った技術者として雇用していて、現在は、私を含めて12名が働いている。

大槌町のサイトを受託し、行政サイトだけではなく、ポータルサイトという大槌町関係のwebサイトを集めた玄関口みたいなサイトを作成した。同時に、大槌応援団サイトという、大槌に興味がある方に登録していただいて、そこで情報発信、相互交流していただけるようなサイトも作成した。

5月に浪板海岸に新しく建物ができ、そのエリアの管理とコワーキングスペースを運営している。中心市街地がどうなるかまだ決まらず、使える建物が限られているので、事務所として活用できるようなスペースとしてスタートした。

## ◆ 意見交換

### ○佐々木議員

皆さん名古屋や大阪など遠くから来た方が多く、世代によっても印象は違うと思うが、皆さんの現在お住まいの釜石市または大槌町の土地柄の印象について率直なところをお聞かせいただきたい。こんな感じだな、こういうところがなくなればすごくよくなるのにとというようなところがあればお聞きしたい。我々はここに住んでいるからわからないが、そういう外からの視点は大事だと思う。

**【回答：神谷さん】** 皆さんがよくないと思っているようなところは、都会から来た人にとっては逆におもしろい。地域のしがらみなどは確かに面倒なところもあるが、温かく感じる。

今、大槌町で結婚して子育てをする立場になって、大槌町での人のつながり、夫や夫の家族が今までに培ってきてくれた縁で、いろいろな方がすごく温かく接してくれていると感じる。生活も、今はネットで買い物は全部できるので、言うほど不便でもない。

逆に今の復興を見ていて感じるのは、中途半端に都会化しようとしているのが残念に感じる。中途半端にきれいな町ができるのだろうかと思う。昔の大槌町に戻してということではないが、目指す方向がはっきりしていないというか、都会化しようとしすぎているように思う。

**【回答：中村さん】**印象としては人が特徴的だと思っている。優しく、すぐ受け入れてくれた。もっと方言が強いと思ったが、標準語で理解できたし、東京のことも情報としてよくご存じなので、ギャップは感じない。

また、熱くて面白い人が多く、それが一番魅力的。すごくプライドを持っている漁師さんとか、色々な価値観の人がいて、それを自分の言葉で話せる人がおり、そこがかっこいいし魅力的だと思う。

こうなったらいいなと思うことは、釜石市はラグビーワールドカップが開催されるので、Wi-Fi（ワイファイ）がもっと整備されたらいいと思う。仕事もしやくなるし、海外の人と話すと、Wi-Fi（ワイファイ）がないと困るという話をすごくよく聞く。

## ○小野議員

年代によって育て方には違いがあると思うが、小学生、中学生を地域の人材として育成するにはどのような手法があると思うか。

例えば、大槌町立大槌学園や大槌町立吉里吉里学園では、ふるさと科を設けて地域の郷土芸能や文化風習などを教えているが、小学生や中学生、高校生を集中的に育成するには、どのような方法がいいと思っているか。

**【回答：菅野さん】**私は、大槌町のふるさと科学校支援コーディネータというものを2年間務めており、学校には学校の授業があると思う一方、島根県の海士町という離島の有名なモデルの話であるが、町を好きになるためには、「アタッチメント」、「ロイヤリティー」、「エンゲージメント」の3つの要素があるとされている。「アタッチメント」とは郷土愛、「ロイヤリティー」とは忠誠心、「エンゲージメント」とは約束のようなこと。小中学生は、地域に愛情を持つということが大事だと思っている。その上で、高校で復興教育を行うことによって、大槌町のために何かやりたいと思っていくことがロイヤリティーにつながっていくと思う。したがって、小中学生は郷土愛を育むような教育、中学生の後半から高校生には、町に対して何ができるのかということを考えさせるような教育をしていくことによってアタッチメントからエンゲージメントまで徐々に育っていくと思っている。

**【回答：伊藤さん】**自分たちは、小学生の子供たちを主な対象としているが、自分たちだけで全てを賄えると思っておらず、いろいろなキャリア教育や本当の学習なども必要だとは思いますが、自分たちは、もっと基礎的なところをちゃんとしたいと思っており、子供たちにとにかく遊ばせることをメインで取り組んでいる。子供は遊びをつくる天才で、自然の中に送り出せば、自分たちで遊び、その遊びから基礎的なところが成長し、そこから学びにも集中できるようになる。小学生ながらも応急仮設住宅の課題意識のようなものをもって、大人との会話の中で出てくる課題を我々が拾って、それを解決するためのイベントを子供たちと一緒にやることによって人はだんだん成長していくと思っている。ただ、小中学生なので目に見えた成長は見えないが、10年、15年先に生きてくると想って、未来の人材育成に向けて取り組んでいる。

**【回答：神谷さん】**大槌町に来て子供たちと接して一番気になったのが、どの子供も「大槌なんて」という言い方をする。将来の話をする、大槌町なんて何もないし、大槌町に残ってもしょうがない。だから東京に出ていくことがナンバーワン、次が仙台くらいで次が盛岡、大槌町に残る人は、仕事を継ぐ長男や役場に就職する、または、どこにも行けない人といった

感じで、選択肢の中で大槌町に残ることは下に位置付けされていたことが気になっていた。しかし、この世代がこのような話をするのは、親世代が間違いなく同じようなことを話しているからだと思う。

私たちは、伊藤さんに近いスタンスで、中高生育成授業を行っているが、地元愛を教える大人が楽しそうにしていないから何も伝わらない。大人自身が楽しんでいる姿を見せていないと思っている。例えば、大槌町ではこんな魚が獲れるといったことを教えるのではなく、獲っているときは面倒だったり、朝早く起きることは嫌だったりするが、仕事の後にたばこを一服吸っている姿がかっこよければ子供はかっこいいと思うのではいか。職業や自然などのカテゴリーにとらわれず、いろいろな楽しさ、生き方など大人が本当に楽しいと思っている部分を伝えることができればいいと思う。そのためにはまずは大人が楽しむ。子供は敏感だから大人が嘘をついているのはすぐに感じる。

**【回答：菊池さん】** 若いころ大槌町に帰ってきたときには、神谷さんのように外から来た感覚を持っていたが、ここで暮らしているうちに周りの環境に染まっていき、昔の人たちの考え方に近くなってきた。経済的にも余裕がでてきて、それが当たり前になってきて、本当に恐いことだと思っている。皆さんのような方たちが大槌町に入って、どんどんものを言うてもらうことによって、原点に戻ってやらなければいけないと思った。今日お集まりの皆さんは初めてお会いする方が多いが、そういう方の意見を聞いて自分を振り返ってみることも大切だと改めて思った。

### ○田村座長

私は、いわて復興未来塾で神谷さんと平館さんのお二人の話を聞いて、大槌町にはすごい女性がいると驚きました。沿岸地域では、このような人材がどんどん輩出されていると思いますが、新たな視点で、私はこういう人材育成を図っていきたいということはないでしょうか。

### ○嵯峨議員

私の地元は久慈市だが、小さい頃は田舎が嫌で東京に行ったが、戻ってきて感じることは、まちがコンパクトでいいし、自然もある。今までのことを見直すことは必要だと思って聞いていた。そこで、神谷さんに伺いたいのが、大槌町役場を残す、残さないといった答えのない、また、どちらとも判断できるし判断できないようなことを判断していくことを、企業研修の場などで課題として出しながら震災復興に関わり、人材を呼び込むことにも役立てているとお聞きしたが、これはすごい発想だと思う。このような発想はどこから生まれたのか。

**【回答：神谷さん】** おらが大槌夢広場が行っている震災ボランティア事業は、代表理事が様々な企業の方と話している中でやってくださいと言われて始めた事業であるが、このままこの事業を続けても津波のことを聞きたい人は、都会からのアクセスのいい仙台の閑上地区や南三陸に行ってしまう。そこで、大槌町が生き残るために様々な企業と話をするなかで、大槌町は被災地域で唯一町長が津波で亡くなっている。このような状況のなかで、町民一人一人がその場その場で決断を下し、その場その場を生き延びていくしかなかったという背景自体が素材になるんじゃないか、それが可能なのは唯一大・町ではないかと考え、今のワークショップの手法にたどりついた。

ワークショップでは、自分たちの認識として、判断と決断は違うもので、判断とは過去のことに対して行うこと、決断は覚悟をもって未来のために行うことと説明している。最終的に必要なことは腹をくくることが、自分が全て責任を負うという覚悟を持つこと。それによ

てAを選ぶBを選ぶという決断をすることだと思っている。

決断に当たっては、相手の想いや立場を理解することが必要で、役場を壊す、壊さないについても、それぞれの立場があって主張していることなので、多数決で決めてしまえば、片方のことを無視してしまうことになる。ワークショップの手法は、参集者に対していろいろな問いかけや、参集者の意見の傾聴、決断や人の想いをいかに大切にすかなどいろいろな対応ができる。まずは、相手の話をよく聞くことを重要視して行っている。リーダーシップは先ほど説明したように決断をしていくことであるが、ワークショップの手法は、ファシリテートのやり方を少しずつ変えることによって、いろいろな場面に活用可能だし、いろいろな企業に対応できる。

この手法を考え出したのは代表理事で、私たちがいろいろな人と話し合っ、地元の人の意見をよく聞いて、今の手法に至った。

## ○田村座長

皆さんにはリーダーシップを発揮していただいていると思っており、一方、担い手を育てていくためにいろいろな課題もあると思うが、二宮さんはどうでしょう。

**〔回答：二宮さん〕** 私たちは、外からの支援は長く続かないので自分たちで決める仕組みをつくるのが大事なことを伝えている。支援の場面においては、課題が生じたときに釜援助隊ならどうする、周りはどうしているかと考えるのではなく、自分たちにとって何が最適なのかを考えればいいと伝えている。

自治会をつくる相談などでは、話を聞いているとこの話は失敗するなということがあがるが、自治会活動では、失敗によって著しく人間関係が悪くなるとか、命を失うようなことは通常ありえないので、そのままにしておく。ひとつの例として、掃除当番の話し合いの中で上手くいかないと思われることについて、上手くいかなかったらどうするかと聞いたところ、そのときには役員がやるからとの回答があった。自治会が出した結論を確認して、半年間そのままにしたところ、上手くいかず、今度は役員が文句を言い出した。7階建ての県営団地だったので、上手くいっている階の話聞いてみることにし、コミュニケーションを図ることや上手くいっている事例をまねることなど学んでもらっている。

失敗から学んでもらい、問題を解決するために自分たちで考えて物事を進めていく仕組みをつくっていくことが必要である。

また、将来を担う人材という若い人と考えがちだが、高齢化社会では、70代、80代の人にも役割がある。災害公営住宅には、これまで集合住宅に住んだことのない方が多い。そのため、支援に当たっては、ルールを作り、みんなで守っていく、そのようなことを学び、地域の見守り体制につなげていくことを考えながら、高齢者の方も育成していく観点で物事を進めるよう意識している。

## ○田村座長

その視点でのアドバイスは非常に重要だと思う。柏館さん、どうですか。

**〔回答：柏館さん〕** タウンポート大町では、中高生を対象に体験学習の受け入れを行っている。昨年度は体験希望者がなかったのですが、今年度も学校には受け入れの周知をしているところ。

また、タウンポート大町には9社のテナントがあるが、今年度は若い人が会長と副会長をやっている。30代の若い人たちに自分たちでやりたいことを考えてやってもらい、それが仮に失

敗したとすれば失敗から学び、商売のため、町のために勉強してほしいと思っている。

**〔回答：伊藤さん〕** 団体名に人を掲げているとおりに地域の人にこだわって活動している。地域で頑張るいろいろな人がいて、その人にはこういうバックグラウンドがあるということについて、体験プログラムなどを通じて実際に来てそのような人たちと接して魅力を感じてもらいたいと思っている。

大事にしていることは、こういうことをやりたいというなるべく小さな声を拾って、一個一個寄り添い考えながら成功に導くことを理想としている。ただ、自分たちだけではやり切れないところもあるので、大学生などの若い人たちを一カ月程度の滞在型ボランティアとして受け入れて、地域の人たちと交流し、一緒に考えることによって、物事が進み、思いが実現していくようなことを行っている。ただし、二宮さんの意見にあったように、そういう人はずっといないということは前から思っていた危機感なので、自分たちも成長していく必要があると思っている。ただ、人は一人では成長できず、人と交流することで成長していくので、外の人を受け入れて、地域の人と関わる機会を持つことで、地域の人も、来る大学生も育ち、ついでにリピーターになってくれるというイメージで取り組んでいる。

### ○千葉議員

今日は、釜石市から4名、大槌町から4名の計8名の方が参加されていて、そのうち菊池さんには大変申し訳ないが、7名の方は若い方たちでそれぞれ活動しているが、今回の参加者の皆さんは普段それぞれの地域または双方の地域で交流はあるのか。自分たちが行っている仕事や同じ分野での関わりや交流はあると思うが、皆さんそれぞれ異なった分野に取り組んでおられ、それぞれ若い力で地域を振興しているが、横のつながりのようなものはあるのか。

また、商工会の年配の方との交流や難しい課題の解決のための意見交換の機会などはあるのか。ある場合、交流してこういうふうにしていきたいといったことがあれば伺いたい。

**〔回答：菊池さん〕** 伊藤さんとは一度お会いしたことがあるが、その他の方々は今日初めてお会いした。この会が始まる前の雑談で、近所の方と知ったり、また、名刺交換して皆さんの立場を知ったり、私ども商工会の会員であることがわったような状況で横のつながりやこのような意見交換を行ったことはない。

### ○千葉議員

菅野さんの関係の資料で以前いただいたものに、後援者が大槌町教育委員会、岩手県教育委員会、岩手大学、最後に東京大学とあったが、どういう関わりで後援者になっているのか。

**〔回答：菅野さん〕** 一番関わりを持っているのは町の教育委員会である。大学は研究フィールドを求めているので、そういったところで連携を求められるというのはあるが、その程度である。教育部門では陸前高田市から久慈市までの沿岸部の市町村や盛岡市、奥州市と高校生をどう育てていくかというコミュニティーをつくっていて横の連携はあるが、他業種の方と関わる機会というのはいらない。

### ○飯澤議員

いわて復興未来塾に参加した方がいると聞いたが、復興塾に参加して何かプラスになったことはあるか。

**〔回答：神谷さん〕** これまでの活動で県に直接私たちの活動を知ってもらう機会があまりなく、県との直接的な接点がなかったため、知事に出席いただき、私たちの活動を知ってもらう機会となり、また、知事からいろいろな意見をいただくことができた。逆に県から県が推進する施策についての意見を求められたり、意見交換会での役員就任などの依頼もあり、県と直接的なパイプができたことは非常にありがたかった。

### ○飯澤議員

今回の大震災からの復興は、私たちが生きている時代になんとかしなければいけない課題と思っている。

今の行政をめぐる状況を見ると、震災前、地方分権や地方が独立して自分たちの独自色を生かそうなどの動きがあったが、どうしても復旧・復興には国のハード事業などに頼らざるを得ない部分がある一方、やはり県の役割は大きいと思っている。

県には、未来を見据えて広域的な観点で産業振興を進めるべきと言っているが、なかなか思い切ったことができていないと感じている。

今日、皆さんのお話を聞いて、地域の魅力などを引き出す事業を行っていただいていることに大変敬意を申し上げたいと思う。先ほどお話しがあった、「大槌なんて」という言葉は、岩手県内どこの地域にも当てはまるわけで、地域に対するプライドというか矜持というのが薄くなっているなかで、大震災が起き、まさにこの部分をしっかりと取り組むことは、逆にチャンスと捉えて行う時期だと私は捉えている。

これから皆さんのやっている事業をもっともっと育てていくためには、何らかのコーディネートする事業や部署なども必要かと思うが、今日の意見交換を通じて、最後は今いる若者を育て、人材をつくっていくことが大事であり、人材育成のモデルケースをつくらなくてはいけないという思いを持った。

釜石に沿岸広域振興局ができて、企画部門もあるので、そことうまく連携して、皆さんから注文も出していただいて、ものを動かすということをどんどんやっていただきたいと思う。

最後に、広域振興局体制は、産業の振興のために地域の産業をどうしようかという観点に立って組織され、最初に県南広域振興局ができて、それにならってその他の広域振興局もできたが、なかなか機能していないと思う部分があるので、県に対しても臆せず御意見をいただいた方がよろしいのではないかと思います。

**〔回答：柏館さん〕** 県には、グループ補助金を受ける際に支援をいただいたが、今後は、行政のどこの部署でどのようなことが実施されているかのなどの情報を把握して、行政からの発信を待つことなく、事業者として行政を使いこなすくらいになっていく必要があると感じた。

### ○飯澤議員

もう一つ、グループ補助金についてだが、宮城県では、商工会議所に社会保険労務士を入れて、一次募集の段階で相当数の申し込みを行った。岩手県はその辺りの対応が慎重だった。

**〔回答：菊池さん〕** グループ補助金の申請では、県の担当者に大槌町に何度も来てもらい、また、何とかしたいと動いてもらったが、前例のないことについては、県で判断ができないということで国に問い合わせ、結果、前例がないとの理由で認められなかったケースがあった。

### ○飯澤議員

大震災という異常事態にあつて、その復興に当たっては、既存の法律を当てはめては何もできな

い。そのため、きわめて厳しい状況であることを地元から声を上げて、自分たちのやりたいこと、それに対して支援が必要である状況を訴えこと、また、様々な方々の知恵を借りること、体制をつくることも大事なことだと思う。

**〔回答：菊池さん〕** 商工会としては、構成員の人材育成、支援が一番の課題となっている。現在、大槌町には、商工会青年部の20代から40代までの何名かで組織する若旦那グループがあり、このような若い人たちを観光協会の理事にするなど若者を前面に出す試みをしている。

**〔回答：平館さん〕** 今までの意見を聞いて、補助金がないと人材育成はできないのかと疑問を持っている。私たちは、継続した人材育成は、補助金に頼らず、事業として取り組まなければ長続きしないものとの考えでこれまで進めてきている。

私たちは、地域の方を雇用しており、半分の6名が女性である。そのうち、4名が子育てをしながら働いている。

3、4年間、事業を実施して、大槌町で働きたいがどう働いていいかわからない、技術がないといった女性が多いと思っている。

いままでは1年間教育しながら雇用してきたが、教育にはすごく時間がかかるので、これからは技術レベルが高い人たち以外に、もう少し短期間の1、2カ月の教育ができる仕事を生み出そうと思って動いているところである。働きたいニーズはあるが、技術レベルの向上や幅広い技術習得は難しいため、いくつかの人材育成プラン、レベルを用意する必要があると思っている。

#### ○田村座長

千田議員、女性の視点から何かありませんか。

#### ○千田議員

感想になるが、発想の転換によって、地域には様々な宝や人材があることを発見でき、また、どんだん前に引っ張ることができることを皆さんの発言を聞いて痛感した。苦労も多いと思うが、やはり地域の皆さんの人材育成に大きくかかわっていくことはすごく大事なことだと思った。今後、内陸地域との情報交換ができるようになれば、更にいい地域づくり、県内でも全国に胸を張れるようなまちづくりができるようになって感じた。今後も、特に子供たちの育成に力を注いでいただきたいと思う。

#### ○城内議員

活動資金が潤沢ではないと思われるなかで、活発に活動されていることに感心しているところだが、皆さんの活動にあたって財源で困っていることはないか。

今日の意見交換では、岩手県人はコミュニケーション能力が不足している人が多く、反省する必要があると感じた。震災は大変不幸なことではあり、また、多くの方が故郷を出て行ったが、そのことで逆に皆さんに釜石市、大槌町に来ていただき、多くの財産が入ってきてくれたことは嬉しい話だと思っている。

玉石混淆のこの地域で、様々な感性を持った方々に出会うことによって、人が人によって磨かれると思う。たぶん同じ顔ぶれでいると、そのまま石になっていくのだろうと今日の話聞いていて思った。いろいろな意味で窮屈なことはあると思うが、自信を持って活動していただきたい。困ったことがあったら先ほども話があったとおりに、県にできることもあると思うので、我々もしっかりと応援していきたい。

◆ 閉会

○田村座長

本日、意見交換をさせていただき、改めて沿岸地域は、人材の宝庫になりつつあると感じた。

本格復興完遂に向けて議会としても、更なる取り組みが必要であり、本日、皆様からいただいたご意見、ご提言については、県議会の全議員が情報共有し、今後の議会活動に活かしてまいりたい。

これからも、県議会に対する御意見や御提言があれば、地元の県議会議員あるいは県議会事務局までお寄せいただきたい。

本日は、貴重なお時間をいただき誠に感謝申し上げます。